

地方公会計制度による財務書類の整備について

<導入の目的>

これまでの「単式簿記による現金主義会計制度（官庁会計）」を補完するものとして、「複式簿記による発生主義会計制度（公会計）」に基づく財務書類を作成し、資産等を把握することにより、財政の透明性を高め効率的で適正な財政運営に役立てることを目的とします。

<導入の経過>

- ・平成26年4月30日

総務省発表の「今後の新地方公会計の推進に関する研究会報告書」にて統一的な基準が示されました。

- ・平成27年1月23日

「統一的な基準による地方公会計マニュアル」が示され、「統一的な基準による地方公会計の整備促進について（総務大臣通知）」の中で、全ての地方公共団体に対し、原則として平成27年度から平成29年度までの3年間で統一的な基準による財務書類等を作成するよう要請がなされました。

このことを受けて、本市では平成28年度決算から財務書類の作成を行っています。

<導入のポイント>

① 複式簿記の導入

→現金の収入・支出のみを取り扱ってきた従来の「単式簿記」の考え方に加え、資産や負債の増減を一覧的に把握する「複式簿記」の考え方を取り入れることで、資産等のストック情報の「見える化」を図ります。

② 発生主義会計の導入

→現金の収入・支出に着目した従来の「現金主義会計」ではなく、資産や負債の増減に影響を与える事柄の発生に着目した「発生主義会計」を導入することにより、現金の収支を伴わない減価償却費、退職手当引当金等のコスト情報の「見える化」を図ります。

③ 固定資産台帳の整備

→保有する全ての資産の取得価格、耐用年数等を網羅的に記載する固定資産台帳を整備することにより、資産が除売却処分されるまでの長期にわたる会計上の管理が可能となります。

④ 統一的な基準による比較

→公会計基準を統一することにより、団体間での比較が容易になります。

○作成の範囲

会計及び団体名	区分	会計区分
一般会計	雲仙市	一般会計等
国民健康保険特別会計		全体会計 ※1
後期高齢者医療特別会計		
国民宿舎事業特別会計		
温泉浴場事業特別会計		
水道事業会計		
下水道事業会計		
県央地域広域市町村圏組合(一般会計)	一部事務組合	連結会計 ※1
島原地域広域市町村圏組合(一般会計)		
島原地域広域市町村圏組合(介護保険事業特別会計)		
雲仙・南島原保健組合(一般会計)		
雲仙・南島原保健組合(介護老人保健施設事業特別会計)		
雲仙・南島原保健組合(病院事業会計)		
長崎県市町村総合事務組合(一般会計)		
長崎県市町村総合事務組合(市町村会館管理事業特別会計)		
長崎県市町村総合事務組合(市町村会館馬町別館管理事業特別会計)		
長崎県市町村総合事務組合(公平委員会特別会計)		
長崎県市町村総合事務組合(交通災害共済事業特別会計)		
県央県南広域環境組合(一般会計)		
長崎県後期高齢者医療広域連合(一般会計)		
長崎県後期高齢者医療広域連合(後期高齢者医療事業会計)		
長崎県病院企業団(病院事業会計)		

※1 全体会計 . . . (一般会計) + (特別会計) + (公営企業会計)
 連結会計 . . . (全体会計) + (一部事務組合会計)

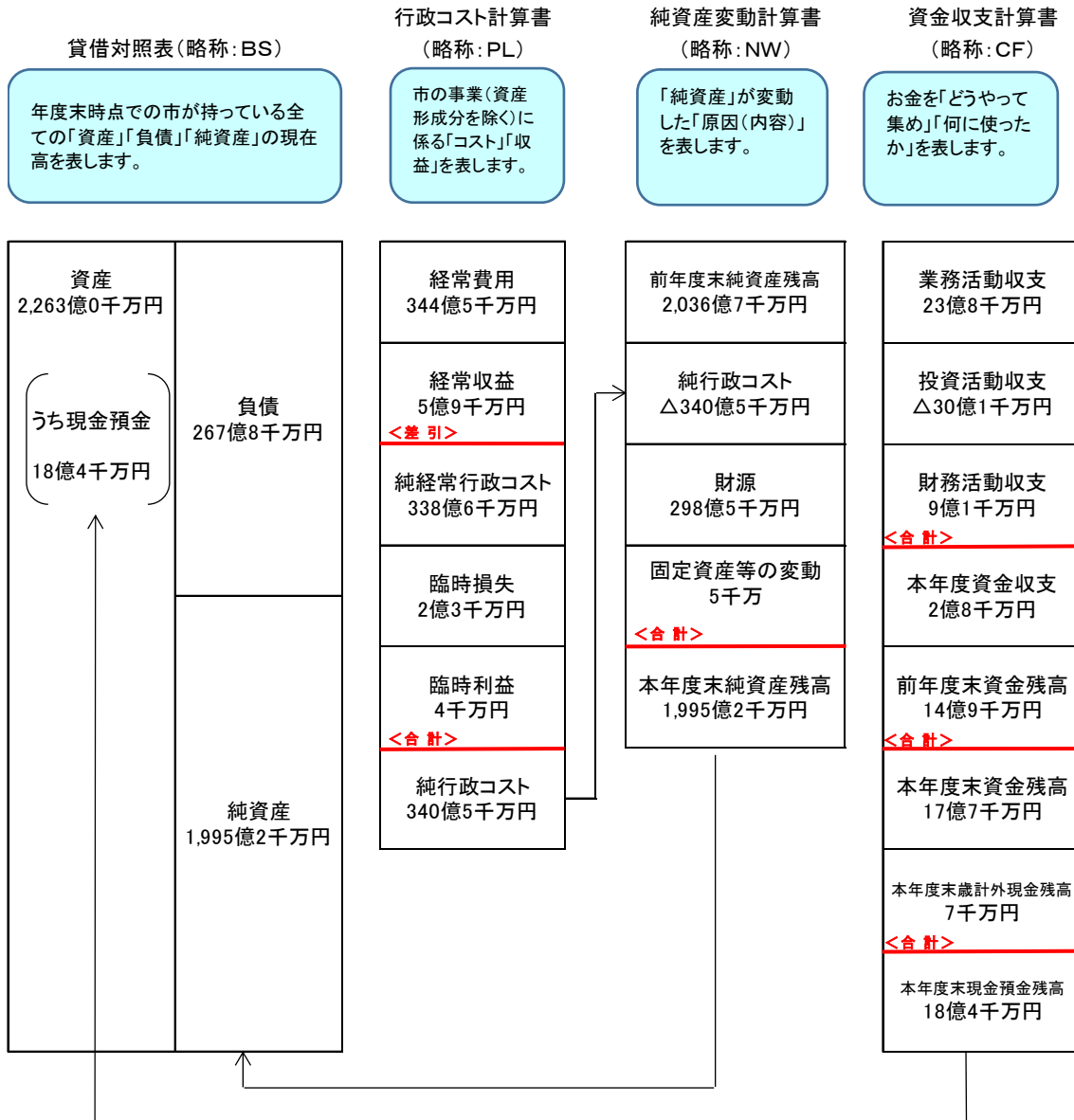
<財務書類の体系>

○財務書類とは

財務書類は、資産や負債、コスト（費用）やその財源等の状況を企業会計の手法（発生主義、複式簿記）を用いて作成する書類です。

財務書類は、「貸借対照表」、「行政コスト計算書」、「純資産変動計算書」、「資金収支計算書」の4表で構成しており、各表間で下図のとおり相互関係を有しています。

○財務書類4表構成の相互関係



※1 貸借対照表の資産のうち「現金預金」の金額は、資金収支計算書の本年度末現金預金残高と対応します。

※2 貸借対照表の「純資産」の金額は、純資産変動計算書の本年度末残高と対応します。

※3 行政コスト計算書の「純行政コスト」の金額は、純資産変動計算書にマイナス表記されます。

貸借対照表
(令和3年3月31日現在)

(単位:千円)

科目名	金額	科目名	金額
【資産の部】		【負債の部】	
固定資産…①	209,558,114	固定負債…⑩	23,352,737
有形固定資産	198,707,975	地方債…⑪	19,444,513
事業用資産…②	33,567,024	長期未払金	-
土地	12,641,813	退職手当引当金	3,904,219
立木竹	3,622,933	損失補償等引当金	-
建物	44,545,752	その他	4,004
建物減価償却累計額	-30,763,047	流動負債…⑬	3,434,168
工作物	7,070,646	1年内償還予定地方債…⑭	3,094,957
工作物減価償却累計額	-5,423,394	未払金	-
船舶	-	未払費用	-
船舶減価償却累計額	-	前受金	-
浮標等	-	前受収益	-
浮標等減価償却累計額	-	賞与等引当金	264,783
航空機	-	預り金	74,429
航空機減価償却累計額	-	その他	-
その他	-	負債合計…⑯	26,786,905
その他減価償却累計額	-	【純資産の部】	
建設仮勘定	1,872,321	固定資産等形成分…⑰	224,336,523
インフラ資産…③	164,900,206	余剰分(不足分)…⑱	-24,819,020
土地	4,497,752		
建物	283,993		
建物減価償却累計額	-167,452		
工作物	381,329,458		
工作物減価償却累計額	-222,085,976		
その他	-		
その他減価償却累計額	-		
建設仮勘定	1,042,431		
物品	1,653,404		
物品減価償却累計額	-1,412,659		
無形固定資産	35,499		
ソフトウェア	35,499		
その他	-		
投資その他の資産	10,814,639		
投資及び出資金	327,749		
有価証券	22,319		
出資金	305,430		
その他	-		
投資損失引当金	-		
長期延滞債権	183,465		
長期貸付金	1,612,227		
基金	8,725,376		
減債基金	-		
その他	8,725,376		
その他	-		
徴収不能引当金	-34,178		
流動資産…⑤	16,746,294		
現金預金…⑥	1,841,694		
未収金…⑦	109,112		
短期貸付金	111,552		
基金	14,666,857		
財政調整基金	1,991,189		
減債基金	12,675,668		
棚卸資産	23,370		
その他	539		
徴収不能引当金	-6,829	純資産合計…⑲	199,517,503
資産合計…⑨	226,304,408	負債及び純資産合計	226,304,408

雲仙市の貸借対照表 (令和3年3月31日時点)

<貸借対照表とは>

貸借対照表は、表の左側に市が保有する全ての「資産」、右側にその資産を得るための資金の調達方法(財源)を「負債」と「純資産」に分けて表したものです。

「負債」に計上される金額は、地方債や退職手当引当金といった今後支払い義務が発生する金額(将来世代が負担する金額)となり、「純資産」に計上される金額は、税収や国や県の補助金など、これまでに収入済の金額(これまでの世代が負担した金額)となります。

<雲仙市の貸借対照表>

<p>資産の部</p> <p>①固定資産 2,095億6千万円 ②事業用資産 335億7千万円 (庁舎や学校等、事業を行うための資産) ③インフラ資産 1,649億0千万円 (道路や公園等、生活の基盤となる資産) ④その他 110億9千万円 (物品、証券、基金等、その他固定資産)</p> <p>⑤流動資産 167億5千万円 ⑥現金預金 18億4千万円 (当期末時点での現金預金残高) ⑦未収金 1億1万円 (現年調定分の未収金) ⑧その他 147億9千万円 (換金性の高い基金や短期貸付金等)</p> <p>⑨資産合計(①+⑤) 2,263億0千万円</p>	<p>負債の部</p> <p>⑩固定負債 233億5千万円 ⑪地方債 194億5千万円 (返済期限が1年を超える地方債の額) ⑫その他 39億0千万円 (退職手当引当金等) ⑬流動負債 34億3千万円 ⑭1年内償還 予定地方債 30億9千万円 (返済期限が1年以内の地方債の額) ⑮その他 3億4千万円 (賞与等引当金等)</p> <p>⑯負債合計(⑩+⑬) 267億8千万円</p> <p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">将来世代が負担する金額</p>
<p>純資産の部</p> <p>⑰固定資産等形成分 2,243億4千万円 (資産形成に要した金額) ⑱余剰分(不足分) △248億2千万円 (市が使うことのできる金銭)</p> <p>⑲純資産合計(⑰+⑱) 1,995億2千万円</p> <p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">これまでの世代が負担した金額</p>	

資産合計(①+⑤) 2,263億0千万円 負債・純資産合計(⑯+⑲) 2,263億0千万円

「負債」「純資産」は、「資産」を取得するために要する金額となるため、表左側と右側の合計額は必ず一致します。

<本市の状況>

本市は、一般会計ベースで2,263億0千万円の価値の資産を保有しています。資産の内訳として、市役所庁舎や学校など市が事業を行うための「②事業用資産」と道路や公園など市民の生活の基盤となる「③インフラ資産」があり、②と③の合計額は1,984億7千万円で、全資産の87.7%を占めています。

一方で、地方債などの「⑯負債合計」は267億8千万円(対資産合計:11.8%)、税収や国・県の補助金などの「⑲純資産合計」は1,995億2千万円(対資産合計:88.2%)となっています。

仮に「⑯負債合計」が「⑨資産合計」を上回り、「⑲純資産合計」がマイナスになると「債務超過」となり、不健全な財政状況であるということになりますが、地方自治体の借金である地方債は、投資的経費にしか充当できず、その償還も建設した公共又は公用施設の耐用年数以内でなければならないとされているため、自治体の貸借対照表では債務超過は発生しないとされています。

統一的な基準による地方公会計の整備により、従来の決算統計や健全化判断比率等の既存の指標に加え、資産・負債に関する指標の算出が可能となり、財政状況をより多面的に分析できるようになります。同団体内での経年比較や人口規模が類似している団体との比較、指標の内訳となる基礎数値に着目し、現在の財政状況や将来的な見通しを客観的に把握することが重要です。

＜貸借対照表の分析＞

地方公共団体の貸借対照表では、資産の現在高が圧倒的に大きく、また資産と負債の差額である純資産の残高も大きくなります。これは、借金があってもそれを担保する資産が多く、貸借対照表上では不健全な状態ではないことを意味しますが、多くの資産を保有することにより発生する将来的なリスクについては注意が必要です。

名 称	算 式	単 位	本 市				全国類似比較 1～5万人(R1)
			R2年	R1年	H30年	対前年度	
① 債務償還可能年数	$\frac{\text{地方債残高}}{\text{業務収入}-\text{業務支出}}$	年	9	17	7	△ 8	11
② 純資産比率	$\frac{\text{純資産残高合計}}{\text{資産合計}} \times 100$	%	88.2	88.8	89.4	△ 0.6	78.3
③ 実質純資産比率	$\frac{\text{純資産合計}-\text{インフラ資産}}{\text{資産合計}-\text{インフラ資産}} \times 100$	%	56.4	57.2	58.8	△ 0.8	57.6
④ 住民一人当たり資産額	$\frac{\text{資産合計}}{\text{住民人口(期末時点)}}$	千円	5,290	5,291	5,346	△ 1.0	3,104
⑤ 住民一人当たり負債額	$\frac{\text{負債合計}}{\text{住民人口(期末時点)}}$	千円	626	593	565	33.0	672

※表中の「全国類似1～5万人」欄の数値は、全国の類似団体の令和元年度財務諸表の各勘定科目の平均を算出し、指標化したものです。

①債務償還可能年数 [指標類似団体比較] R1：16年(11番目/32団体)

債務償還可能年数は、「経常的に確保ができる業務活動収支の黒字額を全て地方債の返済に充てた場合、地方債を何年で完済できるか」を表したもので、「自治体の返済能力」を確認することができます。

令和2年度においては、小浜体育館建設や超高速ブロードバンド及び愛の夢未来センターの建設等に伴う地方債発行が増大したことにより、地方債残高が令和元年度と比較して9億2千万円増加しております。また、R1で増加した下水道事業特別会計繰出金が減少した影響により業務活動収支の合計が12億0千万円増加しております。

こうしたことにより、令和2年度においては、償還可能年数を短縮する結果となりました。

令和3年度以降においても、小浜体育館の建設等の大型公共事業に伴う地方債発行が控えており、さらに地方債残高が増大することが予想されます。経常的な経費を抑制し、業務活動収支の黒字を可能な限り大きく確保することや、中期財政計画に基づいた繰り上げ償還の確実な実施等が対策として求められます。

・[BS] R1地方債残高：216億2千万円（7番目/32団体）、類似団体平均191億8千万円

②純資産比率 [指標類似団体比較] R1：88.8%（4番目/32団体）

純資産比率は、民間企業においては財務の安全性を表す指標ですが、公会計においては、地方公共団体が保有する資産の世代間での負担割合（資産に対する純資産の割合が高いほど将来世代の負担が小さく、逆に純資産の割合が低いほど将来世代の負担が大きいと考えられる）を示す指標となります。

地方公共団体の場合は、規模の大小にかかわらず平均して70%前後となりますが、本市の場合は88.2%となっており、資産のうち9割近くが現在及び過去の世代の負担（税収や国や県の補助金など既得の財源）により形成され、将来世代の負担（地方債など将来に負担が発生する財源）は残り1割程度という状況です。この要因としては、本市がこれまで継続的に繰上償還を実施し、地方債残高の抑制を図ってきたことが挙げられますが、道路や施設などの公共施設は将来にわたって市民に利用されるものであることから、世代間の負担の公平性という観点から見ると、不均衡が生じていると言えます。

・[BS] R1純資産合計：2,036億7千万円（3番目/32団体）、類似団体平均814億7千万円

・[BS] R1資産合計：2,293億9千万円（3番目/32団体）、類似団体平均1,039億9千万円

③実質純資産比率 [指標類似団体比較] R1：57.2%(11番目/32団体)

実質純資産比率は、経済的取引にはなじまないインフラ資産の価値を差し引いた場合の純資産比率であり、民間企業の自己資本比率や株主資本比率と呼ばれるものに相当します。これは実質的に借入れを担保する資産の比率であって、本市は全国平均より高い数値になっています。

・[BS] R1実質純資産(純資産-インフラ)：344億1千万円（9番目/32団体）、類似団体平均305億6千万円

・[BS] R1実質資産(資産-インフラ)：601億2千万円（8番目/32団体）、類似団体平均530億8千万円

④住民一人当たり資産額 [指標類似団体比較] R1：5,291千円（4番目/32団体）

住民一人当たり資産額は、資産合計を期末時点の住民人口で除した数値です。インフラ資産など各団体が行政機能や住民の生活基盤を維持するために最低限保有しなければならないものは一定量存在するため、人口が小規模な団体は大規模な団体に比べ住民一人当たり資産額が大きくなる傾向にあります。

本市は全国平均より約1.7倍の数値となっており、今後、施設の維持管理や更新に要するコストが他団体に比べ多額になることに留意して将来の財政運営の見通しを立てるとともに、公共施設等総合管理計画を確実に推し進めることが必要となります。

⑤住民一人当たり負債額 [指標類似団体比較] R1：593千円（23番目/32団体）

住民一人当たり負債額は、負債額を期末時点の住民人口で除した数値です。住民一人当たり資産額と同様に、人口の小規模な団体は住民一人当たり負債額が大きくなる傾向にあります。本市は全国平均から低い数値となっていますが、資産額が他の自治体と比較して大きく、資産の老朽化が進んでいることから、維持管理や更新に要する費用といった将来的に発生する潜在的な負債があることに留意しなければなりません。

・[BS] R1負債合計：257億2千万円（8番目/32団体）、類似団体平均225億2千円

【様式第2号】

行政コスト計算書

自 令和2年4月1日
至 令和3年3月31日

(単位:千円)

科目名	金額
経常費用…⑤	34,450,316
業務費用	14,285,492
人件費…①	3,733,437
職員給与費	2,580,364
賞与等引当金繰入額	264,783
退職手当引当金繰入額	124,748
その他	763,543
物件費等…②	10,316,843
物件費	2,933,534
維持補修費	607,315
減価償却費	6,775,994
その他	-
その他の業務費用…③	235,212
支払利息	74,180
徴収不能引当金繰入額	-10,375
その他	171,407
移転費用…④	20,164,824
補助金等	14,617,267
社会保障給付	4,480,443
他会計への繰出金	786,555
その他	280,558
経常収益…⑧	587,962
使用料及び手数料…⑥	284,803
その他…⑦	303,159
純経常行政コスト…⑨	33,862,354
臨時損失	230,370
災害復旧事業費	82,365
資産除売却損	146,202
投資損失引当金繰入額	-
損失補償等引当金繰入額	-
その他	1,803
臨時利益	38,883
資産売却益	38,883
その他	-
純行政コスト…⑪	34,053,841

雲仙市の行政コスト計算書（令和2年4月1日～令和3年3月31日）

＜行政コスト計算書とは＞

行政コスト計算書は、福祉や教育など経常的に行う行政サービスに使った1年間のコスト（費用）とその行政サービスに直接支払われた使用料や手数料などの収益を対比させ、収益によって賄うことができなかった行政コストを表したものです。したがって、道路や公共施設の整備といった資産形成に要する費用は含まれません。

＜雲仙市の行政コスト計算書＞

業務費用	①人にかかるコスト (職員給料や議員の報酬など)	37億3千万円	経常的な行政サービスに要する経費（経常費用）
	②物にかかるコスト (消耗品や委託料、建物の維持・管理や減価償却費など)	103億2千万円	
	③その他のコスト (支払い利息など)	2億4千万円	
移転費用	④社会保障費などのコスト (社会福祉サービスや生活保護など外部へ支出する金額)	201億6千万円	経常的な行政サービスに直接支払われる使用料や手数料などの受益者負担（経常収益）
	⑤経常費用 (毎年度経常的に発生する費用)	344億5千万円	
	⑥使用料や手数料 (直接的な利用者負担)	2億9千万円	行政サービスに対する収益によって賄うことができなかった1年間の行政コスト
	⑦その他 (利子及び配当金など)	3億0千万円	
	⑧経常収益 (毎年度経常的に発生する収益)	5億9千万円	
	⑨純経常行政コスト(⑤-⑧) (毎年度経常的に発生する行政コスト)	338億6千万円	
	⑩臨時損益 (災害復旧など臨時的損失と資産売却など臨時的収益の差)	1億9千万円	
	⑪純行政コスト(⑨+⑩) (当年度に発生した行政コスト)	340億5千万円	

＜本市の状況＞

本市では、毎年度経常に行われる行政サービスの費用である「⑤経常費用」が344億5千万円となっています。経常費用は、人件費や物件費などの「①～③業務費用」と、社会福祉サービスや生活保護など外部へ支出される「④移転費用」で構成されており、業務費用が142億9千万円（対経常費用：41.5%）、移転費用が201億6千万円（対経常費用：58.5%）となっています。

一方、サービスの対価として利用者が負担する使用料や手数料等の「⑧経常収益」は5億9千万円となっており、経常費用の1.7%に留まっています。この数値は、受益者負担が適正かどうかを検討する一つの目安となります。

行政サービスにより毎年度経常的に生じる「⑨純経常行政コスト」は338億6千万円となっており、災害復旧に係る事業費等の臨時的に発生した「⑩臨時損益」を含めた最終的な「⑪純行政コスト」は340億5千万円となっています。この純行政コストを賄うためにどのように資金を調達してきたかは、次ページの純資産変動計算書で表されます。

純資産変動計算書

自 令和2年4月1日
至 令和3年3月31日

(単位:千円)

科目名	合計	固定資産等形成分	余剰分(不足分)
前年度末純資産残高…①	203,669,155	227,746,690	-24,077,535
純行政コスト(△)…②	-34,053,841		-34,053,841
財源…⑤	29,853,886		29,853,886
税金等…⑧	16,906,159		16,906,159
国県等補助金…④	12,947,728		12,947,728
本年度差額…⑥	-4,199,954		-4,199,954
固定資産等の変動(内部変動)		-3,458,470	3,458,470
有形固定資産等の増加		4,139,293	-4,139,293
有形固定資産等の減少		-7,444,758	7,444,758
貸付金・基金等の増加		1,458,409	-1,458,409
貸付金・基金等の減少		-1,611,413	1,611,413
資産評価差額		-	-
無償所管換等	48,302	48,302	
その他	0	-	0
本年度純資産変動額	-4,151,653	-3,410,168	-741,485
本年度末純資産残高…⑧	199,517,503	224,336,523	-24,819,020

雲仙市の純資産変動計算書 (令和2年4月1日～令和3年3月31日)

<純資産変動計算書とは>

純資産変動計算書は、貸借対照表の純資産が、1年間でどのように変動したか、変動の原因(内容)を表したものです。

前ページの行政コスト計算書で求めた純行政コストがマイナスで示され、純資産の財源である税金や国県等の補助金といったこれまでの世代が負担してきた資源でどの程度賄われたか、世代間の負担を読み取ることができます。

<雲仙市の純資産変動計算書>

①前年度末純資産残高 (期首時点の純資産残高)	2,036億7千万円	行政コスト計算書の数値と一致
②純行政コスト(△) (行政コスト計算書の最終収支)	△340億5千万円	純行政コスト(②)と財源の合計(⑤)を比較することで、受益者負担以外の財源でどの程度コストが賄われているかを把握することができる。
財源	③税金等 (地方税、地方交付税等)	169億0千万円
	④国県等補助金 (国県等からの補助金)	129億5千万円
	⑤合計	298億5千万円
⑥本年度差額(②+⑤) (行政コストを財源でどの程度賄えたか)	△42億0千万円	(プラスの場合) 純資産が増える=(イコール) これまでの世代の負担によって将来世代も利用可能な金額(資源)を貯蓄した。 (マイナスの場合) 純資産額が減る=(イコール) 将来世代が利用可能な金額(資源)をこれまでの世代が消費して行政サービスを受けた。
⑦その他の変動 (資産形成のための財源内部変動や無償譲渡・取得された固定資産額等)	5千万	
⑧本年度末純資産残高(①+⑥+⑦) (期末時点の純資産残高)	1,995億2千万円	貸借対照表の数値と一致

<本市の状況>

行政コスト計算書で求めた令和2年度の「②純行政コスト」が340億5千万円であるのに対して、「③市税や地方交付税などの税金等」は169億0千万円、「④国県等からの補助金」が129億5千万円、「⑤財源の合計」298億5千万円となっております。「⑤財源の合計」で賄うことができなかった「②純行政コスト」は「⑥差額」として示され、その額は42億0千万円に及び、前年度末の純資産残高を消費して賄っている状態です。最終的な「⑧本年度末純資産残高」は1,995億2千万円となっております。

<行政コスト計算書・純資産変動計算書の分析>

行政コストと純資産変動額を併せて分析し、行政コストに対しどれだけの収入で賄われたかを見ることで、その団体の収益状態やコスト水準が適正であるかどうかを判断することが出来ます。

名称	算式	単位	本市				全国類似団比較 1~5万人(R1)
			R2年	R1年	H30年	対前年度	
① 純資産変動額	純行政コスト(△)+財源	億円	△ 42.0	△ 48.4	△ 35.4	6.4	△ 0.4
② 住民一人当たり行政コスト	$\frac{\text{純行政コスト}}{\text{住民人口(期末時点)}}$	千円	796	685	634	111.0	521
③ 住民一人当たり人件費	$\frac{\text{人件費}}{\text{住民人口(期末時点)}}$	千円	87	81	83	6.0	90
④ 住民一人当たり減価償却費	$\frac{\text{当期減価償却費}}{\text{住民人口(期末時点)}}$	千円	158	155	154	3.0	94
⑤ 住民一人当たり補助金等	$\frac{\text{補助金等}}{\text{住民人口(期末時点)}}$	千円	342	225	198	117.0	110
⑥ 行政コスト対税率等比率	$\frac{\text{純経常行政コスト}}{\text{税金等+補助金等受入}} \times 100$	%	113.4	119.1	114.4	△ 5.7	98.3
⑦ 受益者負担の割合	$\frac{\text{経常収益}}{\text{経常行政コスト}} \times 100$	%	1.7	2.2	2.3	△ 0.5	4.4

①純資産変動額 [指標類似団体比較] R1: △48億5千万円 (31番目/32団体)

本市における純資産変動額は、48億5千万円のマイナスとなっており、1年間に発生する経費(コスト)が収入(財源)を超過しており、不足分は純資産を消費して賄っている状況です。言い換えると「負担を将来世代へ先送りしている状況」と言えます。全国の類似団体平均では、1年間に発生する経費が収入でほぼ賄えることから、本市は著しく悪い状況であると言え、対策の検討は急務であると言えます。

具体的な原因としては、補助金等や減価償却費などの行政コストが高く、使用料・手数料等の収益が低いことが挙げられ、(1)行政コストの削減(2)経常収益(使用料・手数料等)の確保など対策が必要です。

・[PL] R1純行政コスト: 297億0千万円(1番目/32団体)、類似団体平均: 174億6千万円

②住民一人当たり行政コスト [指標類似団体比較] R1: 685千円 (7番目/32団体)

住民一人当たり行政コストは、純行政コストを期末時点の住民人口で除した数値です。人口の小規模な団体は大規模な団体に比べ一人当たりの行政コストが大きくなる傾向にあります。本市の場合は全国平均より高い数値となっており、コスト水準が高く行政サービスの効率性が低いと考えられます。

③住民一人当たり人件費 [指標類似団体比較] R1: 81千円 (22番目/32団体)

住民一人当たり人件費は、人件費を期末時点の住民人口で除した数値で、人材の効率性を測定するための指標です。地方公共団体では住民の数にかかわらず一定の職員配置が必要であり、人口が少ないほど行政活動の効率性が低くなることから、人口が小規模な団体は大規模な団体に比べ住民一人当たり人件費が大きくなる傾向にあります。本市は全国平均より低い数値となっています。

・[PL] R1人件費: 35億1千万円(7番目/32団体)、類似団体平均: 30億2千万円

④住民一人当たり減価償却費 [指標類似団体比較] R1: 155千円 (7番目/32団体)

住民一人当たり減価償却費は、当期減価償却費を期末時点の住民人口で除した数値で、公共施設の年々の減耗分を表しています。本市の住民一人当たり減価償却費は全国平均に比べて約1.5倍の数値となっており、保有する施設等の資産が他市と比較して、多いことがわかります。これは、充実した施設で行政サービスを展開しているとも言えますが、一方で耐用年数終了時の将来の更新費用が多額にのぼることも示唆しています。必要以上に過大な施設配置になっていないか、公共施設総合管理計画の推進に合わせて再度見直す必要があります。

・[PL] R1減価償却費: 67億2千万円(2番目/32団体)、類似団体平均: 31億4千万円

⑤住民一人当たり補助金等 [指標類似団体比較] R1: 225千円 (1番目/32団体)

住民一人当たり補助金等は、他の団体・事業に対し支出した費用を期末時点の住民人口で除した数値で、本市は全国平均に比べて約2倍の数値となっています。各種団体や一部事務組合への支出の内容・用途は多様であるため個別に検討しなければなりません。高い値を示していることから補助金等支出の見直しを検討する必要があると考えられます。

・[PL] R1補助金等支出: 97億7千万円(1番目/32団体)、類似団体平均: 36億7千万円

⑥行政コスト対税率等比率 [指標類似団体比較] R1: 119.1%(4番目/32団体)

行政コスト対税率等比率は、純経常行政コストを税金等の一般財源等で除した数値で、資産形成を伴わない行政コスト(毎年度経常的に必要となる行政コスト)を、どの程度、当該年度の税金等の財源で賄っているのかを示す指標です。この指標が100%に近づくほど資産形成を行う余裕度が低く、また100%を上回る場合、過去から蓄積された資産が取り崩されたか、又は翌年度以降に負担が引き継がれたことを意味します。

本市では、税金等の財源のみでは行政コストを賄いきれていないことがわかります。税金等の財源を増加させることは一般的に難しいため、補助金等支出の見直しや、公共施設等の整理・統合に伴う減価償却費の削減など、経常的な行政コスト削減の必要性を示す結果となっております。

・[PL] R1純経常行政コスト: 296億1千万円(1番目/32団体)、類似団体平均: 172億1千万円

・[NW] R1財源: 248億6千万円(3番目/32団体)、類似団体平均175億0千万円

⑦受益者負担の割合 [指標類似団体比較] R1: 2.2%(28番目/32団体)

受益者負担の割合は、行政サービスの提供に対する受益者負担(使用料・手数料など)を表すもので、経年比較や類似団体との比較を行うことにより、使用料・手数料などのサービス料金を見直すための判断材料にすることができます。本市においては全国平均より低い数値となっているため見直しが必要であると考えられます。仮に、類似団体平均レベルの受益者負担率(4.4%)を目指す場合、約6億7千万円の使用料等の経常収益増収か、経常行政コスト削減が必要であると分析することができます。

経常行政コスト削減の取り組みはもとより、施設等使用料及び減免基準の見直し等の対策の検討が必要です。

・[PL] R1使用料及び手数料: 3億1千万円(10番目/32団体)、類似団体平均2億5千万円

資金収支計算書

自 令和2年4月1日
至 令和3年3月31日

【様式第4号】

(単位:千円)

科目名	金額
【業務活動収支】	
業務支出	27,518,570
業務費用支出…①	7,353,746
人件費支出	3,576,571
物件費等支出	3,680,440
支払利息支出	74,180
その他の支出	22,555
移転費用支出…②	20,164,824
補助金等支出	14,617,267
社会保障給付支出	4,480,443
他会計への繰出支出	786,555
その他の支出	280,558
業務収入	30,030,224
税込等収入…④	16,882,524
国県等補助金収入…⑤	12,563,519
使用料及び手数料収入…⑥	286,207
その他の収入	297,974
臨時支出…③	145,272
災害復旧事業費支出	82,365
その他の支出	62,907
臨時収入	9,546
業務活動収支…⑦	2,375,928
【投資活動収支】	
投資活動支出	4,678,826
公共施設等整備費支出…⑧	3,563,791
基金積立金支出…⑨	1,095,035
投資及び出資金支出	-
貸付金支出…⑩	20,000
その他の支出	-
投資活動収入	1,664,970
国県等補助金収入…⑪	374,663
基金取崩収入…⑫	1,179,463
貸付金元金回収収入…⑬	83,006
資産売却収入…⑭	27,838
その他の収入	-
投資活動収支…⑮	-3,013,857
【財務活動収支】	
財務活動支出	2,940,840
地方債償還支出…⑯	2,934,236
その他の支出…⑰	6,604
財務活動収入	3,855,700
地方債発行収入…⑱	3,855,700
その他の収入…⑲	0
財務活動収支…⑳	914,860
本年度資金収支額…㉑	276,931
前年度末資金残高…㉒	1,490,334
本年度末資金残高…㉓	1,767,265
前年度末歳計外現金残高	54,277
本年度歳計外現金増減額	20,152
本年度末歳計外現金残高…㉔	74,429
本年度末現金預金残高…㉕	1,841,694

雲仙市の資金収支計算書 (令和2年4月1日～令和3年3月31日)

<資金収支計算書とは>

資金収支計算書は、市の1年間の資金の増減を業務活動、投資活動、財務活動の主要な3つの収支活動に区分し、どの活動に資金が必要であったかを表したものです。また、1年間の現金の動きを表すので、市の決算書に近い形の財務書類になります。

<雲仙市の資金収支計算書>

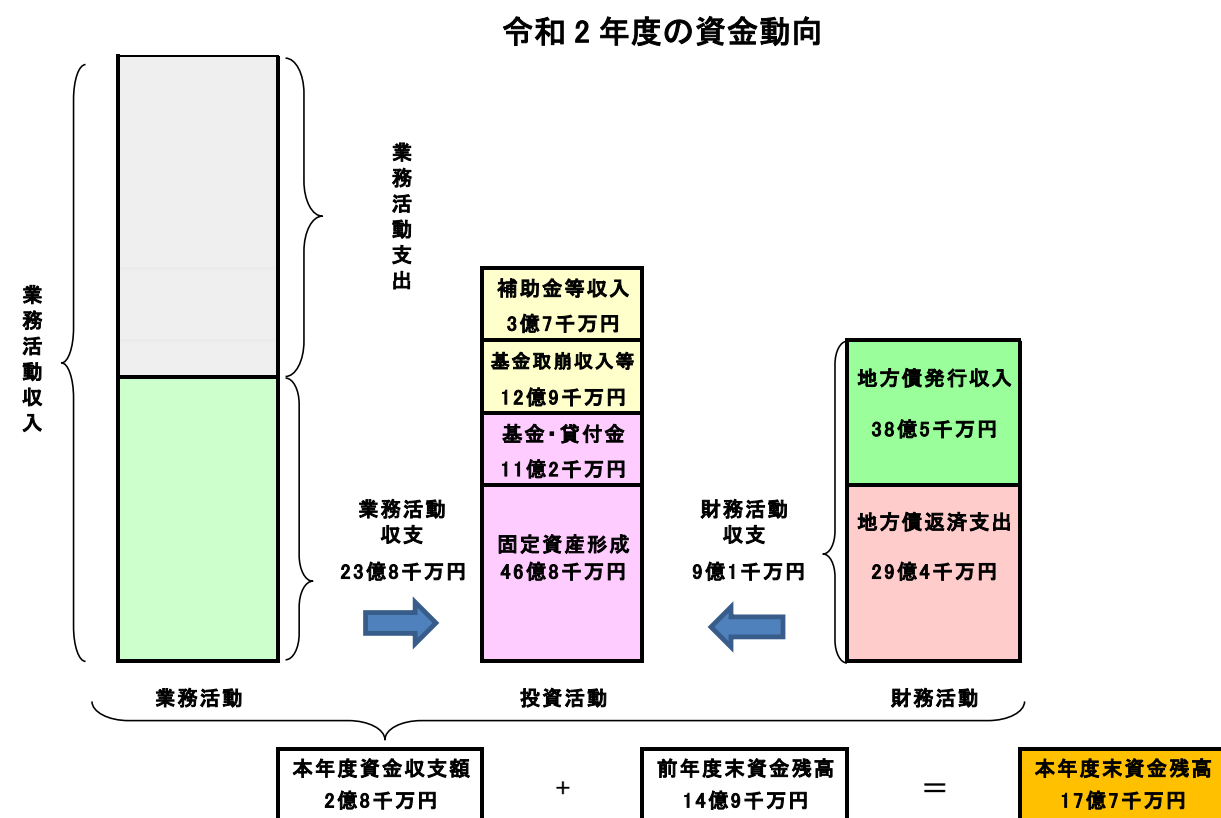
業務活動	支	①業務費用支出(人件費、物件費等)	73億5千万円	毎年度経常的に収入・支出されるもの 一般的にプラス収支になる。
		②移転費用支出(補助金、社会保障給付等)	201億6千万円	
		③臨時支出(災害復旧事業費等)	1億4千万円	
	入	④市税など	168億8千万円	
		⑤国県補助金	125億6千万円	
		⑥その他	5億9千万円	
	⑦【業務活動収支】	23億8千万円		
投資活動	支	⑧道路や公共施設などの整備費	35億6千万円	公共施設等の整備や基金の積立といった投資的な活動に対して、補助金や基金の取崩しをどの程度充当したかを表す。
		⑨基金への積立	10億9千万円	
		⑩貸付金	2千万円	
	入	⑪国県補助金	3億7千万円	
		⑫基金の取崩し	11億8千万円	
		⑬貸付金元金回収	8千万円	
	⑭その他	3千万円		
⑮【投資活動収支】	△30億1千万円			
財務活動	支	⑯地方債の償還	29億3千万円	市債等、外部からの借入や、返済などの収支を表す。
		⑰その他	1千万円	
	入	⑱地方債の発行	38億5千万円	
		⑲その他	0千万円	
	⑳【財務活動収支】	9億1千万円		
	㉑本年度資金収支額(⑦+⑮+⑳)		2億8千万円	
	㉒前年度末資金残高		14億9千万円	
㉓本年度末資金残高(㉑+㉒)		17億7千万円		
㉔本年度末歳計外現金残高		7千万円		
㉕本年度末現金預金残高(㉓+㉔)		18億4千万円		

貸借対照表の数値と一致

- ・ [CF] R1 業務活動収支 : 11 億 8 千万円 (21 番目/32 団体)、類似団体平均 24 億 1 千万円
 - ・ [CF] R1 投資活動収支 : △17 億 9 千万円 (20 番目/32 団体)、類似団体平均△25 億 2 千万円
 - ・ [CF] R1 財務活動収支 : △10 億 7 千万円 (6 番目/32 団体)、類似団体平均 2 億 0 千万円
 - ・ [CF] R1 年度資金収支額 : 4 億 6 千万円 (4 番目/32 団体)、類似団体平均 9 千万円
- ※なお、資金収支額が黒字を示している団体は、類似団体 32 団体中 16 団体存在する。

<資金収支計算書の分析>

資金収支計算書の役割は、貸借対照表で明らかになった財政状態をもとに投資の分析を行うことです。「業務活動収支」では経常的な経費の収支、「投資活動収支」では投資に関する資金の収支、「財務活動収支」ではその余剰額または不足額が分かります。



※本来、業務活動・投資活動・財務活動はそれぞれ並行して進めるものですが、公会計上ではこのような見方をすることが出来ます。

業務活動収支については、基本的に黒字になるものであり、その残額が投資や負債の返済に支出されるほか、資産の更新のための貯えの原資にもなります。R2においては新型コロナウイルス感染症の対応により収入、支出ともに増加しましたが、R1で増加した下水道事業特別会計繰出金が減少した影響により、業務活動収支の合計が23億8千万円と、前年度と比較して12億0千万円増加しております。

この残存資金を投資活動に充てましたが、小浜体育館や愛の夢未来センター建設経費等の公共施設等整備費支出46億8千万円や基金積立・貸付支出11億2千万円などを賄うことができず、11億8千万円の基金取崩に加え、新たに38億5千万円の地方債を発行することになりました。

限られた原資での財政運用が図られているところですが、今後の必要な資産更新への支出は大きな懸念となっております。いずれにしろ大前提は日常生活での資金余剰をもっと大きく生み出すことであり、そのためには市の行政活動の経営的改善が不可欠であると考えられます。

財務4表から分析できる本市の特徴と今後の課題

以上、「貸借対照表」、「行政コスト計算書」、「純資産変動計算書」、「資金収支計算書」の4表について、それぞれ個別に分析を行いました。これらを踏まえて総括した場合、本市の財政上の特徴として

- ①資産額が大きい
- ②行政コストが大きく、受益者負担が小さい

の2点が挙げられます。

貸借対照表の分析で述べたように、資産額が大きいことは、借金を担保する資産が多く貸借対照表上では不健全な財政状態でないことを意味しますが、本市の「住民一人当たり資産額」や「住民一人当たり減価償却費」を見ると、全国の類似団体平均の約1.5倍の数値となっており、地方公共団体の中でも人口規模に対する資産額が特に大きいことが分かります。また、資産の減価償却費が多額になることに伴って、「住民一人当たり行政コスト」も全国平均を大きく上回る現状となっています。

本市の有する資産は老朽化が進行しているため、維持管理・更新に係る将来的な負担は多額になることが予想されます。現在、本市では公共施設等総合管理計画を策定し、公共施設の延床面積の削減を掲げていますが、これを確実に推進し資産の額を減らす取り組みが必要です。

また、「住民一人当たり行政コスト」が多額となっている他の要因として、補助金等が大きく、その一方で経常収益が小さいことが挙げられます。人口規模に近い類似団体との比較でも、「住民一人当たり補助金等」は全国平均より約2倍大きく、「受益者負担の割合」は全国平均より小さい現状となっています。これは、経常的に行う行政サービスについて、本市が他団体より多くのコストをかけている一方で、利用者が負担する使用料や手数料等については他団体より少ないことを意味し、収支の均衡が図られていない状態で行政運営を行っていることを意味します。

補助金等の経常費用を抑制し、使用料や手数料等の経常収益を増加させるためには、組織や市民全体で問題意識を持ち、行政サービスの効率性を追究していくことが不可欠です。補助金等の支出の内容が適切であるか、また受益者が負担する使用料等を見直すことが出来ないか等を改めて検討する必要があります。